
エイリアン大遭遇

kiyoshi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エイリアン大遭遇

【Nコード】

N2950P

【作者名】

kiyoshi

【あらすじ】

飲食店で突然降って湧いた様に私の前に現れた可愛いベッティ嬢、其処から私のSFが展開する。

2009、4月忘日、ひるさがり時、日課の街歩きの休憩站オアシスにたどり着きホツとする。数年来行き付けの庶民飲食店である。土日ではないので、長い廊下に並べられたテーブルには空席が多い。

先ず紅茶の冷凍タンクへ茶を汲みに行く。紅茶自身が結氷して褐色の氷が浮かんでいる。アイスクーキーみたいで、此れは目指す紅茶だ。氷ごとコップに汲みこんで独り占めのテーブルに戻る。チビリチビリ甘味と香りを楽しみながら、何時ものように廊下の天井を見上げる。

この天井は何故かツバメ達に気に入られ、使用中の巣が二つ、空き巣が一つ、営巣半ばで放棄したのが二つもある。使用中の巣では卵がかえっているらしく、親燕が巣から頭を覗かせている。二羽で抱卵を交代しているようだ。

天井に気を取られている私の前に人の気配を感じて視線を目の前に移した。

降って湧いたように、いつの間にか目の前に三、四歳位の縮れた短髪の可愛い童女が私に微笑んでいた。昔のベッティ嬢を見る気がして私は嬉しくなって微笑みを返した。

やがてこの子は何かを私に話しかけた。が何を言っているのか判らない。「え？なに？」と聞き返した。とその子は笑みを続けながら又同じ事を言った。やはり分からない。

私はそろそろ自分の耳に自信を持たなくなった。自分の耳はまだまだしっかりだとは思っているが傍からは耳が遠いと言われている。

私は聞き耳を立てるため、上半身を前に乗り出す。すると今まで立っていたその子も私に習って、椅子に掛けようとするが、椅子は尻よりも高い、其の子は右尻の半分を椅子に引つ掛け、左足のつま先を床に立て、両肘をテーブルに立てて私に顔を近づけた。

「ねえ、ねえちゃん、もう一度言ってくれないかなあ？」
と済まなそうに頼んだ。と直ぐに彼女は笑みをたたえたまま、同じ分からん事を言った。

此処まで来て、私はある想像に辿り着き愕然とし、驚きの声を呑み込んだ。

つまり、この子は機械で物を言うているのだ、その機械の電子回路に故障が生じ、同じ箇所をスキャンしているので同じ事を喋っているのだ。恰も昔の音盤レコードで音溝にキズが出きると針は同じ箇所から音を拾うので同じ音の繰り返しだ。

私の想像は更に飛躍した。あの、何度繰り返ししても分からなかった、あの言葉は大変な事に、実は宇宙語、「宇宙語だったのだ！」。其の次の自分の結論に、私はオドロキの声を飲み込んだ。

大変だ「この子は宇宙人だったのだ」。「エイリアンの子だったのだ」。

私はその子が無性に愛おしくなってきた。思案が脳裏を駆け巡った。この子に連れはいるか？ 降って湧いた様なベツテイ嬢だ、連れは

居ないだろう、どうするか？ 家に連れ帰ろうか、誘拐か？ どうしたものか？ 情け掛けたが身の定め？ いやいや、身の破滅かも。

思案に暮れて居た所へ、ギョウザを詰めたビニール袋を提げて老婦人が足早に腰を低くして私達のテーブルへやって来た。「すみません」と謝りながらその子を連れ去ろうとしていた。

私は慌てて「おばあちゃん、この子を言ってるのか分かりませんが…？」、婆ちゃんは笑いながらその子を見下ろした、するとベツティちゃんは又も例の宇宙語を放送した。婆ちゃんは、「あゝ、あたし、ばあちゃんと一緒に来たのよ」と言ってるのですよ」。

なんと私はこんな他愛ないコメントに振り回されていたのだ。

婆さんは私に会釈してその子を連れ去った。その子とは言えば私に背を向けたまま、バイバイするでもなく、振り返りもせずスタスタと去って行く。呆気ない別れであった。二人は道路を横切り向かいの横丁へ消え去った。

私は呆然と二人の影を追って、又も気がつかなかった事に気付いて再び愕然とした。

あの婆さんは宇宙語を地球語に翻訳した。婆さんも宇宙人だったのだ。そして私をもつと驚かせた事は、婆さんの歳と身なりからして彼女は竹取物語の「おんな姫」と吻合する。ならばあの子は、実に驚くべき事に……かぐや姫？「かぐや姫！」だったのだ！！そして二人の連れ去った先は「おきな（翁）」の待つ星、月なのだ。

それから毎日私はあのツバメの店で密かに「かぐや」の君を待った。強い願望は夢を実現させる力を持つと信じながら。

時恰も、日本の月探査機「かぐや」が月の軌道を廻っていた。機はハイビジョンカメラを搭載して鮮明な月面写真と「地の出」の写真を地球に送信していた。

私は「Youtube」で鮮明な地の出をキャッチした。漆黒の宇宙をバックに月平線の彼方から、青と白の混ざったビー玉の様な神秘的な美しさをたたえて地球がゆつくりと昇る。まことに蠱惑的で幻想的なイメージだった。

<http://www.youtube.com/watch?v>

<http://www.youtube.com/watch?v=xq-2B6UXMM>

<http://www.youtube.com/watch?v=mxJjNWl8QMg>

<http://www.youtube.com/watch?v=mxJjNWl8QMg>

「かぐや」の君も月からこの感動のシーンを見つめていただろうか？。彼女はその美しい星で遇った私の事を、をふと思ってはくれただろうか？

Kiyoshi

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950p/>

エイリアン大遭遇

2010年12月4日13時53分発行